

巻頭言



学会の新たな発展をめざして

磯崎 澄†



情報処理学会は、ここ4年ほど3万人強で会員数の伸びが低迷している。全国大会への論文投稿数、参加者数も同様である。

情報処理技術がますます進展し、かつ関係領域も広まり、また情報処理産業分野がこれだけ急速に拡大しているにもかかわらずである。

確かに、会員数だけが学会の活性化のバロメータではないが、「学会の魅力」あるいは「社会的存在感」を計る重要な尺度の一つと言えよう。本学会の会員数は、まだまだ増大してもおかしくはない。ちなみに米国のIEEE-CSの会員数は約10万6千人である。

今、情報処理技術は俗に「ネ・オ・ダ・マ」化と言われるように、大きく変化しつつある。

また、ソフトウェア・エンジニアリング分野、アプリケーション分野も急速に進展しつつある。情報処理技術は、「新たなエネルギー」のごとく世の中のほとんどの領域で基盤技術として活用され、さらなる広がりを見せている。

情報処理分野の学際領域もまた人文社会、美術・音楽、医学、心理学など非常に拡大している。

情報処理分野の研究者、学生、企業人も急増している。

21世紀へ向けて、情報処理分野は技術、産業両面で最も伸び、ますます重要度を増していく非常に恵まれた環境にある。

このような「時代のフォローの風」を生かし切っていない、本学会のあり方、やり方を謙虚に反省し、思い切って見直し、大胆に変えて行くことが、学会が再発展するために、今問われている。

このような背景から、昨年7月より学会に部会制検討委員会が設置され、「学会の活性化、発展のため、今何をなすべきか」について幅広い観点から検討が進められている。

検討の柱としては、学会の活動領域の拡大、

研究会活動の活性化、 세미나・シンポジウムなどの事業活動の活発化、実業向け新雑誌の発刊、これらを通じての会員サービスの増大と会員増である。

特に、学会の活動領域の拡大は、本学会が情報処理分野での中核的学会としての役割を果たす上で非常に重要である。

本学会は、基礎・理論、ハードウェア、ソフトウェア、アプリケーションの四分野の情報処理分野を対象としているが、情報処理分野は、今や非常に多くの分野と関係している。

したがって、関係する学会とは学際的に大いに交流し、研究会やシンポジウムなど協調した活動を進めることがますます重要となる。また、ヒューマン・ファクタの要素が急速に高まるとともに、美術、音楽、行動科学、心理学などの分野と連携した活動も現実増加している。

一方、情報処理分野では、SE、プログラマなどの実務分野の技術者が急増しているが、本学会の会員増にはほとんど結びついていない。学会活動も、これらの分野の実務者に魅力を感じていただき、欲しい情報やノウハウが得られる学会誌内容や研究会、セミナー活動へ拡充していくことが重要である。委員会ではまた、実務家向けの新雑誌発行の検討も、今年度行っていく予定にしている。

情報処理分野は、21世紀へ向けてより一層の技術の発展と社会の情報化の進展にともない、社会、技術、産業、生活などの幅広い領域で中核的位置づけを占めるようになる。

このような動向下で、情報処理学会は、本学会の見地からだけではなく、より広い社会的、国家的見地からも、21世紀へ向けての力強い新たな発展を目指したい。

会員の皆さんの幅広いご支援と本学会活動への提言と積極的参画を今こそ必要としています。

(平成5年4月12日)

† 本会理事 NTT データ通信(株)